

グローバル通信

Ryukoku University

GLOCAL TSUSHIN

2024.3 vol.64

人がつながり未来をつむぐ「ふるさと近江八幡」をめざして	1
地域の「担い手」を地道に育てていきます	1
修士論文を書き終えて	2
2023年度 修士論文・課題研究 題目一覧	3
第3回先進的地域政策研究講演会感想	4
院生の声届けますー2023年度を振り返ってー	4
早期履修生の感想	4
事務局インフォメーション	4

冬の寒さが長引き、ようやく少しずつ暖かくなり桜の便りに心弾ませる季節となりましたが、みなさまいかがお過ごしでしょうか。さて、今回のグローバル通信64号では、修士論文を書き終えた院生の感想、今年度の修士論文題目の一覧、講演会の感想などを掲載しています。

本号が地域公共人材総合研究プログラムを修了される皆様、また4月よりご入学される皆様にとって、本プログラムの多種多彩な取り組み、そして多方面で研究に邁進する院生の様子を知っていただくきっかけとなりましたら幸いです。

来年度もみなさまのますますのご健勝を心よりお念じ申し上げます。



人がつながり未来をつむぐ 「ふるさと近江八幡」をめざして

小西 理
(近江八幡市長)

近江八幡市は滋賀県のほぼ中心に位置し、北は琵琶湖に接しており、世界的にも珍しい淡水湖の有人島である沖島があります。ラムサール条約の登録湿地である西の湖もあり、ヨシの群生地である水郷地帯は琵琶湖八景の一つに数えられ、重要文化的景観の全国第一号に選定されるなど、水と緑の美しい自然に恵まれた地域です。

またJR東海道本線、近江鉄道が通り、幹線道路は、市域の南側に国道8号、中央部に主要地方道大津能登川長浜線、琵琶湖岸にはさざなみ街道(湖周道路)などがあり、京阪神からの便も良く、東近江地域の玄関口となっています。

歴史的には、安土城や八幡山城が築かれ、近江商人を輩出したまちとして栄えてきました。現在も残る重要伝統的建造物群保存地区の街並みや時代劇の撮影地として取り上げられることの多い八幡堀、多くの神社仏閣や安土城跡などの歴史文化遺産に恵まれ、県内でもっとも観光客が訪れるラ コリーナ近江八幡と共に多くのみなさんに本市を訪れて頂いています。近江牛や近江米、琵琶湖の湖魚やふなずしなど特産物も楽しめる、魅力の詰まった宝箱のようなまちです。

「近江八幡市第1次総合計画」では、こうした本市固有の様々な資源を活かした活力ある地域をつくり、次の世代が地域に愛着と誇りをもち引き継いでいけるよう、【人がつながり 未来をつむぐ「ふるさと近江八幡」】を将来のまちの姿としました。その実現には、我々がまちの宝をより磨き上げ、輝かせ、未来につなげることの出来る「人づくり」というものが何よりも重要となります。

貴学の掲げる、地域を知り、地域で活躍できる人づくりは、正にこのニーズを体現するものであり、これまでの貴学との地域連携協定を通じ、地域公共人材総合研究プログラムによる推薦入試制度の活用やインターンシップ実習生の受入などにより、地域社会が求める高度な識見を有する人材の育成はもとより、新たな視点への気づきなど、本市の人材育成に大きくお力添えをいただいているところです。

今後も、このような双方にとっての学びの機会となる環境を通じ、共に人材の育成に向け取り組んでまいりたいと考えております。

地域の「担い手」を 地道に育てていきます

渡邊 宏二

(特定非営利活動法人
ひらかた市民活動支援センター理事長)



ひらかた市民活動支援センターは、大阪府枚方市を拠点に市民活動のソフト面からの支援とハード面からの支援(廃校利用による複合施設「サブリ村野」の管理運営)に取り組んでいます。

当センターは「市民の自主的参加による廃校を利用したボランティアサポートセンターを創設しよう」という市の審議会がきっかけとなり、この審議会に委員として参加していたメンバーが中心となって2002年に当センターを設立しました。審議会での議論と時勢に合わせて、市民活動に必要な支援を具現化してまいりました。

設立から20年が経過し、経営のブラッシュアップやミッション・活動の見直しに取り組んでいます。

中でも注力している取り組みは、若い人たち(中学生～概ね30歳程度)が地域との接点や市民活動に参加するきっかけを創出する「ボランティア体験」という事業です。枚方市との協働事業として、2022年から学生の夏休みと春休みの期間に実施し、延べ500人超が参加しました。

この取り組みの特徴は、関係するアクターそれぞれの「得意を活かした役割分担」です。例えば、ボランティア活動の内容は当センターよりも連携している他のNPOの方が魅力的です。したがって参加者の受け入れは連携しているNPOにお願いをしています。他方で、単体のNPOでは信頼や広報力の面で参加者の募集が難しいため、その点は当センターや市が担っています。

このように、地域に携わることへのハードルを下げ、担い手育成に力を入れていき、これからの少子高齢・人口減少時代においても地域の生活の質を維持できる素地を市民社会セクターから支えていきたいと考えております。

今後の地域課題の解決のためにはマルチセクター連携が不可欠です。この連携を円滑に行うためには、多様な背景を持つ方が参加し各セクターについて理解を深めていく「地域公共人材総合研究プログラム」は、今後ますます求められていくものと考えております。連携・協働ができる人材の育成に大いに期待しています。今後とも、よろしく願いいたします。

修士論文を書き終えて



中村 真也

(政策学研究科修士課程1年)

修士論文を書き終えて感じることで、本当に多くの学びがあり、濃い1年間でした。研究を通して、文献調査や定量的、定性的な裏付けを基に論理的に整理をすることの難しさを強く感じたと同時に、探求することの面白さ、分析の中での新たな気づき、書き終えた時の達成感など他では経験のできないことをたくさん経験することができました。

社会人院生は時間的制約も多い中で、1年間という短い期間で取り組むことは、とても過酷でした。さらに、これまで統計分析の経験がなかったこともあり、執筆に至るまでに何度も挫折を経験しましたが、その中で、いかに楽しく取り組むか、絶対にやり切るという気持ちだけは忘れずに進めていました。本当に苦労しましたが、ポジティブに研究と向き合えたのは、どんなに忙しくても時間を割いてくださり、丁寧に、時に厳しくご指導をくださった指導教員の先生をはじめ、各授業であらゆる分野からご助言をくださった先生方、日々苦しみを共有しながら、励まされてきた政策学研究科の学生の方々のおかげです。心から感謝申し上げます。

これからも機会を大事にしながら、研鑽に励みたいと思います。



小谷 夏美

(政策学研究科修士課程1年)

「あれ、本当に年明けには書き終わっているのかしら…?」と疑問に思った12月上旬。実質9か月しか作成期間が無いにも関わらず、終盤でスランプ(いや最初からスランプだった気もしますが)に陥った私が本当にかむしゃらに書き出したのは、年の瀬が迫った12月下旬、周囲の焦りに飲まれてのことでした。正直、「一緒に修了するで!いいからはよ書き!」と言ってくれた同期の皆さんがいなければ、本当に2年目に突入していたかもしれません。

修論の作成は学びの連続で、中でも一番面白かったのは、研究の過程で身につけた「論理的に物事を俯瞰する力」を、仕事にも活かしたことでした。また指導教員こそいるものの、やりたいことを決めるのも自分、進め方を決めるのも自分で、常に自分との戦いであった中、最後までやりとげる根性を自分の中に見出せたことも、今までに無い新たな気づきでありました。

つらくもあり楽しくもあった修士課程、この1年で得た貴重な学びを糧として、次のステップに進進していければと思います。



吉田 匠

(政策学研究科修士課程2年)

私は「郊外戸建住宅地における住民主体の空き家マネジメントの役割」というテーマで修士論文の執筆を行いました。学部時代の卒業論文からテーマをガラッと変更したため、課題の背景や論点を整理することに時間がかかりましたが、元々非常に課題意識を持っていた内容であったため、最後まで書き切ることができました。論文の内容はまだ満足がいくものではないですが、自分が高校生の頃から持っていた問いについて、深掘り、考察を行えた経験は個人的に非常に意義深く、充実した時間となりました。修士論文執筆以外にもこの2年間を通して、多くの知識を得ることはできました。しかし、最も自分の中で大きかったのは論理の枠組みを意識できるようになったことです。元々、大学院には論理的な思考を身に付けたいと進学しましたが、この2年間の講義や研究科のメンバーとの議論の中から、意識できるようになったと感じています。

今後、この2年間で学んだことを実際の地域のフィールドで実践していきますが、修了しても理論と実践の往復は続けていきたいと思っています。最後に2年間ご指導いただいた教員の皆様にご場を借りてお礼申し上げます。



No.	区分	修士論文・課題研究 題目	氏名
1	修士論文	南京市生活ゴミ分別政策についての研究	郭 文軒
2	修士論文	グラスゴー市Stalled Spacesプログラムによる未利用地の暫定利用が地区に与える影響に関する研究 地区の空間再編とまちづくり活動との関係性に着目して	田中 智朗
3	修士論文	ワーク・エンゲイジメントを規定するキャリア開発行動と専門的効力感が持つ二面性について 転職意思への影響とリテンション・マネジメントへの示唆	伊藤 悠希
4	修士論文	観光まちづくりの持続性に関する研究 -コロナ禍を経た奈良市奈良町を対象として-	高山 哲弥
5	修士論文	東日本大震災の被災地域における医療施設の再建動向に関する研究 -医療施設の医療機能と立地動向に着目して-	福島 麻斗
6	修士論文	市民参加概念の含意に関する研究~運動の希求性と市民性を背景に~	安井 大斗
7	修士論文	長期的文化政策「欧州文化首都」の変遷と実施に関する研究 -RUHR.2010を対象に-	山内 裕貴
8	課題研究	非営利組織とデジタルマーケティングの関係性に関する一考察 -認定NPO法人D×Pを事例に-	吉川 絢菜
9	修士論文	郊外戸建住宅地において住民主体の空き家マネジメントが果たす役割	吉田 匠
10	修士論文	上海市生活ごみ分別における環境NGOの役割	賈 倩倩
11	修士論文	地方創生のための移住・定住支援策に関する研究 -京都府綾部市を事例として	胡 樂程
12	修士論文	京都市伏見区深草西浦町に住む外国人留学生に関係する地域課題ゴミ問題と防災問題に注目する	李 欣桐
13	修士論文	消防広域化の推進に関する一考察 -京都府を事例として-	松井 秀次
14	修士論文	あさごPayによる地域消費促進とその効果における研究	森田 龍司
15	修士論文	被災建築物応急危険度判定と罹災証明書交付事務の統合-その可能性と障害を考える-	岡田 大斉
16	修士論文	京都市における地震発生時の外国人観光客対応にかかる課題について -外国人留学生と自主防災会の連携の可能性に着目して-	小谷 夏美
17	修士論文	中小企業における知的資産の把握がもたらす従業員への効果について -京都地域を中心に-	中村 真也
18	修士論文	商店街マルシェがコミュニティに与える影響に関する研究 新京極ふれあいマルシェを事例として	細野 光男
19	修士論文	フリーランスの保護におけるフリーランス新法の課題	堀 泰明

第3回先進的地域政策研究講演会感想

講師： 大矢野 修氏

テーマ：「NPO地方行政研究コース設立20周年を迎えて」

松本 安弘（政策学研究科修士課程1年）

本講義を受講し、龍谷大学政策学研究科に若い学生から社会人、行政、NPO職員など多くの属性の学生がいる理由を改めて理解することができました。グローバルな視座が求められる中で、ローカルな地域内で異なるセクターや考えの人同士が同じ目標に向かって活動するために行政やNPO、学生などの間で共通言語を増やしていくために政策学部での学びの場があることが理解できました。

私も特別演習で他の受講生や先生から研究に対し、それぞれの学問分野や視点からフィードバックをいただくことで、個人では気づけなかった解釈の仕方や切り口を知ることができました。今回の講義で改めて色々な解釈で研究を見ることの面白さや大切さを感じ、2年生になっても、他の修士生とお互いの研究について議論する機会を作りたいと思います。



院生の声届けますー2023年度を振り返ってー

安井 慶子（政策学研究科修士1年）

2023年を振り返った時に強く感じたことは「考え続ける」ということです。この1年、研究だけでなく講義やその他の活動を通して様々な情報に触れる機会が多くありました。そのなかで、物事に疑問を持ち調べ知識を蓄え考えるということの重要性を改めて感じる年でした。院生同士の議論の中でも切り口が多様であり、限定された情報のみで物事を見ると視野が狭まってしまうと感じ、柔軟な思考を持ち考え続けることが大切だと思いました。「考えること」は重要だとは認識していましたが、考え続けることで点と点が線で繋がっていき新たな気づきに繋がるため、2024年は修士論文作成に向け、より多く考え疑問を持って問い続けることで研究に取り組みたいと思います。

畑田 麻帆（政策学研究科修士1年）

社会人院生との学びというものの価値をたっぷりすぎるほど感じた一年でした。

政策学研究科の授業では、私のような学部卒の院生と社会人院生はもちろんのこと、先生方や各講義でゲスト講師として講演して下さる専門家の方々とも様々な視点で議論ができ、多角的というものの深みを実感しました。

同じテキスト、同じ講義を受けても現場を知る社会人院生とは見えているものがこんなにも違うのかと、また私がいかに表面的であったか気付かされました。

しかし、現場を知らない未熟な学生としてだけでなく、1人の研究者として意見をできる場がありました。自分の意見の正しさを証明するのではなく、自分がどんなことに興味があり、どんな社会を目指したいのか、自身の研究というものを深められたように思います。

来年度は社会への働きかけをさらに意識して、インパクトのある研究に取り組んでいきたいです。

早期履修生の感想

谷口 慎太郎（政策学部4年）

早期履修制度を利用して学部生の段階で大学院の授業を履修させていただいたことを通して多くのものを得ることができ、また、周りの方々の学びに対する高い熱量を感じることができたよい機会でありました。

超少人数で密にコミュニケーションを取りながら行われる授業、その中でそれぞれの専門分野の視点、問題意識から一つの事柄に向かって議論していくという経験、また、授業を開講している先生からの丁寧なフィードバックは、学部の段階ではなかなか体験することができないものであり、新鮮で、4月が楽しみになりました。そして自分の現状の能力の未熟さを痛感し、自分の学びに対する姿勢を見直すきっかけにもなりました。

川瀬 遥奈（政策学部4年）

大学院科目を早期に履修することで、多くの学びと多様な視点から物事を捉える面白さを改めて知ることができました。

大学院科目は学部科目とは異なり、少人数かつ履修生同士がコミュニケーションを図る機会が多数ありました。そこでは異なるバックボーンをもつ方々が、自分の経験や学んできたことを活かしてコメントされている姿を見てきました。どの方も学びに貪欲で、答えのない問いに各自が独自の視点でコメントし合うという状況は学部では味わうことのできない経験で、かなりの衝撃を受けました。

大学院科目を履修してからは、講義で得た学び・視点を活かして自分の先入観や固定概念をなくすことで、学びの幅が一気に広がったと感じています。これから院生生活を送る私にとって早期履修は、とても有意義な時間でした。

事務局インフォメーション

●学位記授与式

日時：2024年3月16日(土)10:30～
場所：龍谷大学深草学舎顕真館

●入学式

日時：2024年4月2日(火)15:30～
場所：国立京都国際会館

地域公共人材総合研究プログラム ニュースレター「グローバル通信」通巻64号 2024年3月

発行 / 龍谷大学大学院 地域公共人材総合研究プログラム H P / https://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/

連絡先/ 政策学部教務課 編集 / 谷澤莉音、吉田瑞希

TEL:075-645-2285 FAX:075-645-2101

編集補助 // 松尾修、平國祐樹

監修 / グローカル通信編集委員会